

書籍紹介



勝間 和代 著
文藝春秋刊

「断る力」

勝間和代さんと言えば、経済評論家として活躍されていますが、知的生産活動、ビジネス思考等に関しても非常に興味深い考えをお持ちで、近年では、著作活動も活発化される中で、そのような著作物も多々出版されていると認識しています。本書の内容は後者に該当するもので、私自身が仕事の進め方について模索している最中だったこともあり、色々と考えさせられる内容であったため、ここでご紹介させていただくことにしました。

なお、本書をご紹介させていただくにあたり、最初にお断りしておきますが、本書の内容は、賛否両論、大きく分かれるものと思っていますので、ご了承ください。

本書では、「断ること」をしないことが、いかに私たちの生産性向上を阻害し、成長を阻害し、ストレスをためるかということが説明されています。特に日本人は「出る杭」を恐れて、人に無理に合わせて同調しようとしがちですが、そうしていると、自分も組織も疲弊してしまうそうです。そのような状況を打破するためには「断る力」が必要であり、どうやったら「断る力」を身につけることができるのか、その訓練方法を含めて、以下のとおり説明されています。

- ・「断る力」の圧倒的な効用を理解する。

断らないことのメリットは、モノを深く考えずに済むことである。断ることができない人は自己主張ができない人。断る力を持たないと「子どもサッカー」をしてしまう。賢い自己主張を行いながら、自分が集中すべきことに時間と力を集中することで、「スペシャリティ」となり、相手の信頼を勝ち取ることができる。

- ・(ホップ) 自分の揺るぎない軸を持つ。

自分が得意とする分野を早々に見つけて、そこに自分の努力、すなわち時間を惜しみなく配分する。そのために「断る力」を発揮する。得意・不得意なことは、さま

ざまな情報源や評価を使って、自分でその軸を見抜き、組み立て、意識して、それを30代までに完成させる。

- ・(ステップ) 相手への建設的な影響力を発揮する。

自分の軸というのはあくまで、他人との関係の中でその価値が生まれる。相手の力をうまく引き出し、協力関係を築く。大事なことは、相手を理解し、自分を理解し、相手により高い付加価値をもたらすためにはどういう交渉を行い、提案を行っていくかというクセを身につけることである。

- ・(ジャンプ) 「断る力」で、自分と周囲の好循環を作る。

自分の軸をもった人同士が「得意分野」を出し合い、「不得意分野」を補うことで「好循環」が生まれる。間違った考え方や社会にNOを言える力を養う。チームは、多様な人が多様な才能を持ち込み、それをぶつけ合い、昇華し合うことで切磋琢磨されていく。

断らずに何でもこなそうとする人にとっては衝撃的な内容かと思いますが、私自身、そのようなスタイルを否定するつもりはありません。逆に、断る力の意味、扱いを理解せずに濫用してしまうと、組織は混乱を起こすでしょう。皆が仕事を断って責任を押し付けあって、結局何も解決しない状況に陥るようでは意味がありません。断る力のあるべき姿とは、例えば、自分の部署の担当分野、得意分野は何であり、何に全力を注ぐ必要があるのかを明確にして、他の部署からの相談、問い合わせや、複数部署に跨る仕事に対して、自分の部署の担当分野の観点から、必要性やあるべき姿などを含めた賢い自己主張をおこない、いざその仕事をおこなうことになった場合には、各部署が全力で得意分野を出し合って、組織全体として良い結果を導くことかと思っています。

紹介者 特許庁総務課情報システム室 大谷 純

